

ロシア史研究所での一年半

— 留学体験記 1998-2000年 —

池田嘉郎

1998年の秋からモスクワに来ている。ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所の研究生として、日本の文部省を通じて、二年間の奨学金をいただけることになっている。日頃はアルヒーフや図書館に通っているのだが、週に一度、火曜日は研究所全体の出勤日なので、その日は私も地下鉄アカデミーチェスカヤ駅からすぐ近くの建物に足を運んでいる。過ぎ去った一年半の間、多くの研究者と接し、会議に顔を出すなかで、留学したのでなければ得ることの出来ない様々の体験を経ることとなった。とりわけ心に残っているいくつかの出来事を、ここに書きとめておきたい。

ブルダコーフのところ

研究所における指導教官として、私がつねにもっともお世話になっているのが、ヴラジーミル・ブルダコーフである。1944年生まれブルダコーフは、研究所の革命・改革史部門を実質上率いており、近年では、1917年革命期における暴力、諸集団の外界認識、権力の正統性の問題などに大きな関心を注いでいる。ボリシェヴィキのイデオロギーの問題を中心に据えながら、共産党政権の成立について考えようとする私にとって、当事者の認識と外界との関係を重視するブルダコーフの議論はつねに刺激的である。また、彼のもとで仕事をしているのが、ヴァディム・テリツインとサラヴァト・イスハーコフの二人で、ともに30代後半と思われる。テリツインは革命期の農村共同体、イスハーコフは同時期のムスリムの動向を専門にしている。私は、97年春、研究活動を目的とした初めてのモスクワ訪問以来、ブルダコーフとテリツインにはお世話になっている。イスハーコフとは今回知り合ったのだが、ムスリム革命家ヴァリドフの回想に出てくる日本人のことで色々聞かれ、親しくなった。この三人の集っている一室が、研究所の中で私の一番心休まる場所である。

モスクワに着いてすぐの98年11月18日、革命・改革史部門は年に一度の総会を開き、30人程の研究者が顔を出した。初めにテリツインが、ブルダコーフの前任者で、前年9月に亡くなったばかりのヴォロブーフについて、業績を回顧した。ついで、チュチュキンが社会民主主義史の研究動向、フェジュークが内戦史の研究動向を概観し、最後にブルダコーフが部門全体の活動報告を行なった。様々な地域で多彩な研究がなされているが、それらの地域とモスクワとの連絡がろくに整備されていないということが、諸報告を通じて窺える一番の問題点であった。

質疑応答に入ってから、老世代の研究者と、よりあたらしい世代の研究者の間に、私の予想を遥かに越える立場の違いがあることが知れた。まず、ヴォロブーフだけでなく、ミンツの追悼も行なうべきだとの声があがった。前者が共産党体制から自立的だったのに対して、後者はソ連革命史学の大御所である。さらに、自分は十月革命を「赤い動乱」(ブルダコーフの著書名)や「ソヴィエト帝国の誕生」(エス・ヴェ・レオーノフの97年の著書名。タイトルはセンセーショナルだが、マルクス主義国家論の文脈から

ソヴィエト行政機構の形成を追った真面目な研究である)と呼ぶ人とは一緒に仕事は出来ないと言った老研究者もいた。いずれにせよ、私はモスクワ到着後すぐに、ロシアの研究者たちが置かれている生の状況を、間近に見ることが出来たのだ。なお、年次報告のさなかにブルダコフが、諸社会集団や政治勢力の研究がすすむ反面、ボリシェヴィキの歴史にはあまり関心が向けられていない、だが、日本から来た池田はこの問題にとりかかっている、われわれはこうした現象に反応しなければならないと言ってくれた。私は突然のことに驚く一方で、頑張らねばならないと深く思った。

セルゲイ・ジュラヴリョフ

ブルダコフのところとは別に、私はアンドレイ・ソコロフのセクションにも顔を出している。1941年生まれ、ソコロフは、近年、内戦期から30年代初頭にかけて、住民が当局に宛てた手紙を史料集に編むなどして、日常生活史の視点から積極的に仕事を展開している。彼のところに通うようになったのは、外事担当副所長のリュドミーラ・カロドニコヴァが、若い人が大勢いるから行ってみろと勧めてくれたからだ。実際、20世紀政治・社会史全般を扱うこのセクションは、研究所の中でもっとも活気ある場所のひとつとなっている。私はここで、多くの人々とあらたに知り合いになることが出来たが、なかでもセルゲイ・ジュラヴリョフとの出会いは、大きな意味をもっていた。

私が初めてセルゲイに会ったのは、11月10日のことである。この日、ソコロフのところでは会議があり、私も顔を出した。と、自分の机の上にステイーヴン・コトキンの『マグネチック・マウンテン』を置いている、40歳前後とおぼしき男性の姿が目に入った。95年に米国で出版されたこの本は、1930年代のソ連社会における日常生活のコードを解明しようとした画期的な研究で、私はそこから大きな刺激を受けている。そこで、この本がロシアでどのような評価を受けているのか、是非聞いてみたくなったのである。セルゲイは、面識のない私の質問にこころよく答えてくれた。この本は数年前にコトキンが来たおりに、研究室に寄贈していったものである。「社会史」研究であるこの本を、自分たちは高く評価している、と彼は言う。フーコーやセルトーの方法論を取り入れている点についてはどうかと尋ねると、これからの歴史研究は、使える方法は何でも旺盛に取り入れていかねばならない、もちろん、より上の世代はあたらしい方法論に対して消極的であるが、自分たちはそうではないとの返事だった。

それからしばらくして、もう年が明けてからの99年1月末、セルゲイ自身の研究報告を聞くことが出来た。それによれば(また、別の機会に彼から聞いた話もくわえてまとめると)、彼の現在の研究テーマは、1920年代から30年代にかけて、モスクワの工場で働いていた外国人のコミュニティである。社会主義建設の理念に惹かれてやってきた彼らは、理想像とは異なるソ連の現実に直面する。ある者は当局により接近し、ある者は絶望する。個々のグループ間で対立も起こるし、グループ内でも力関係が生じる。そうした小世界は、当時のソ連社会を考えるうえで格好の切り口となる。そのさい、マイクロストリアの方法を用いることが、とくに有効である。すなわち、あるシエマを最初に設定して、そこに事実を当てはめていくのではなく、ある特定の小集団・小社会を対象にして、当時の人々がその都度どのような問題に直面していたのかを、内在的に追っていくことが重要である。これがセルゲイの議論であった。

彼の議論においては、ある集団内での人間の諸関係という問題が、重要な位置を占めているように私には思われた（このときの報告では、彼はとりわけ、情念が人間関係の中で果たす役割を強調していた）。この報告からだいぶしてから、私はセルゲイが『「工場史」現象：1930年代という時代の文脈におけるゴーリキーの企図』（モスクワ、1997）の著者であることに気づいた。あるときヴィーカ・チャジェリニコヴァが、セルゲイのことを半ば冗談に「ロシア・ミクロストリアの創始者」と呼んでいたが、実際、彼は現在のロシア史研究所で、もっとも注目に値する存在である。

ソコロフのところ

私たちは毎週火曜の3時頃に、ソコロフの部屋に集まっている。実は、とくに何かするでもなく、お茶を飲んでいるだけのことが多いのだが、そうしたときの談笑こそが、私にとってはかえがたい体験である。ソコロフのセクションにいる人々のうち、セルゲイと並ぶ中堅研究者のリーダー格が、ヴィーカ・チャジェリニコヴァだ。ヴィーカは、最近ソコロフと一緒に書いた『ソヴィエト史教程』下巻では、戦後からソ連崩壊までを担当しているが、もともとはより前の時代をテーマにしており、20年代のポリシェヴィキの自殺に関する論文などがある。同じく中堅どころにいるのがアレクサンドル・セニャフスキーで、今世紀のロシアにおける都市化の進展をテーマにしている。その妹で、やはりソコロフのセクションに属するエレナ・セニャフスカヤは、まだ30代になったばかりだが、今世紀の諸戦争におけるロシア人兵士の心理をテーマにして博士号をとった。エレナは多才の人で、遙か銀河の彼方に謎の一族が... というペーパーバックの著者でもある。なお兄妹の父親スバルタクも、歴史研究者であった。私とほとんど同世代のタチアナ・スミルノヴァは、20年代の孤児委員会を扱っている。一度、彼女に調子はどうかと聞かれ、「何とかね」と答えたところ、「好きなだけ研究が出来るあなたが『何とかね』はおかしいわ。あたしと違って父が病気というわけでもないのだから」と言われた。タチアナの言うことはもっともであった。他に、内戦期の強制労働を研究しているエレナ・ボリーソヴァ、ネップ期の労働者の生活状況を調べているミハイル・ムーヒンも、私のよき話相手となってくれている。

こうした中堅・若手の研究者がいる一方で、ソコロフのセクションには、ソ連時代から活躍していた古手の研究者たちも籍をおいている。ヴラジーミル・カバーノフ（協同組合史）、ゲオルギー・ズロカーゾフ（1917年の中央執行委員会）、ゲルマン・ツルカン（内戦期シベリアのコルチャーク政権）といった人々である。なかでも私は、ツルカンによく話を聞かせてもらっている。1924年生まれの彼は、終戦直後、ラトヴィアのコムソモールで指導的な地位についていた経歴をもつ。スターリン型社会主義に対する彼の信念は、二つの出来事によって揺らいだという。一つ目は54年、ある女性から「懲役十年プラス文通権剥奪」で受刑中の夫を助けてほしいとの請願を受けた。何とか助けになりたいとツルカンは方々に連絡をとったが、そのうちの一人から、無駄であるとの返事をされた。懲役十年プラス文通権剥奪とは、実際には処刑を意味していたのであると。このとき初めて彼は、自分が信じさせられていたものが現実とは違うことを知ったという。同年、彼は党での昇進を放棄して、歴史研究者の道を選んでいる。ついで、56年のスターリン批判が来る。この二つのショックを経て、彼は社会主義は一つではないとの考えに

いたったという。

ツルカン、ズロカーゾフ、また中堅世代の一人ヴラジーミル・ラーヴロフ（農民ソヴィエトについての著書がある）は、しばしば政治談義に身を入れている。彼らはみな、何らかのかたちでソ連および現在のロシアの政治家たちと直接に接してきた人々であり、たとえば、ゴルバチョフでなくロマーノフが書記長になっていたならば、などという彼らの話には妙な現実感がある。私はこの前の国会選挙の直後、リガチョフ（ゴルバチョフ時代の「保守派」リーダー）は筋を曲げないので誰からも尊敬されているとの話だが、彼は共産党の歴史のどのような部分を継承しているんでしょうかとツルカンに尋ねてみた。すると、「リガチョフは戦争からその直後、共産主義への信念だけから入党した平党员層、それのみを体現しているんだ。俺もそうだった。その信念、熱意を、クレムリンの上層部が自分の昇進のために利用したんだ。プリマコフやヤコヴレフがそういう奴らだ」との返事が返ってきた。プリマコフに対するツルカンの憤りはかなりのものだ。「先日出た彼の回想によると、プリマコフは大学院を出て以来、自分のすべての政治活動を、全体主義体制の内側からの打破に注いできたのだそうだ。それだから、彼は政治局員候補にまでなれたらしいよ」。

方法論について

99年11月2日、ソコロフは「20世紀ロシア史研究の方法論」という題で報告を行なった。論題が論題だけに、30人程が出席した会場はかなり熱くなった。ソコロフは、日常生活史を通じて歴史研究の幅を広げようとしている人であるが、方法論に関しては、よりオーソドックスであらんと強い自覚をもっている。この日の報告では、彼は次のように述べた。ポストモダニズムは印象の羅列による読者への芸術的な働きかけであり、プロの歴史家のとるべき道ではない、自分は歴史主義に従う、分野で言えば社会史であり、トムスンやホプズボームが先達である。これに対し会場からは、「もう歴史主義は葬ろう、進歩の概念は人によりまちまちだ」との声が出た。ヴィーカが「そりゃ史的唯物論。歴史主義とは別」と訂正した。ついで、老ギンペリソンが登壇して言うことに、「報告者は『歴史学の危機』と述べたが、この原稿は数年前に書かれたものではないのかね。われわれはとっくの昔に歴史学の危機など脱した。社会史と言うけれど、国家機構や経済のない社会史など話にならん」。議論はいつしか、文学作品は史料として使えるかどうかという話になった。これに否定的であるソコロフに対し、出席者の一人が「『若き親衛隊』にも『金星勲章の騎士』にも党のことがまったく出て来ない。ここには当時の社会心理が反映されているのだ」と述べた。ソコロフは「自分が言っているのはより古典的な意味である。文学作品に書かれていることは現実ではない。だからそれをそのまま事実として引用することは出来ない」と答えた。

この日の議論は、終始このように、誰もが正反対のことを言い合うような具合で進んだ。同じような論題で日本で誰かが報告を行なえば、やはり同じような混乱状態が生じるであろう。だから私は、よその国で他人の議論を聞いているという印象はまったく受けなかった。他方、それだけに、ロシアの研究者はもう少し欧米（や日本）の動向も視野に入れてくれないものだろうか、感じざるを得なかったのもたしかである。これは、ロシアの研究者と接するたびに、つねづね思わされていることだ。

実際、ソコロフやブルダコーフの部屋には、欧米で出た新刊の研究書が意外なほどに置いてはある。だがそれは、もっぱら著者自身がロシア史研を訪れたさいに寄贈していったもののようだ。まして、一般的に言ってロシアの研究者が、欧米の学術雑誌に定期的に目を通していている気配はない。もちろんこのことは、第一には、価格の問題を初め、ロシアで欧米の書籍を注文するのが比較的困難であるということに由来している。だが、それとともに、ロシアの研究者、なかでもとくに老世代には、どうのこうの言っても自分たちこそがロシア史研究の本家であり、欧米の研究者は自分たちと同格ということはあるとしても、自分たち以上ということはないとの意識があるように見受けられる。ミクロストリアを謳うジュラヴリョフや、常に欧米のあたらしい研究を念頭に置いているブルダコーフのような人は、いまだ少数派にとどまっているのだ。

もっとも、ロシアの研究者にとってロシア史＝自国史であってみれば、彼らが外国における研究の蓄積にさほど目を向けないのは、そう不自然なことではないのかもしれない。ロシア史、またその個々の時期が、世界史の中でどのような位置を占めるのかという問題関心も、彼らにあってはあまり強力なものではない。あるとき私が、あなたたちにとって極東の島国の歴史など大したものではないでしょうと言ったら、ポリーソヴァが語気強く「とんでもない。私たちは1960年代から日本の社会・文化に大きな関心を寄せていたわ。それに、どの社会の歴史もそれぞれが同じ価値をもっている」と言う。「でも、ロシア史が世界史の中で占める位置に比べれば」とさらに言うと、今度はヴィーカが「私にはそういったモチーフはない。私がロシア史をやっているのは、自分の父母や祖父祖母、さらにその前の世代がどのような生活をしていたのかを単純に知りたいから」と、やはり力強く答えた。「世界史の中での位置付け」をめぐる議論に慣れすぎてしまっていた私には、彼らの反応は非常に新鮮なものに写った。

ジェフリー・ホスキングの報告

国際コンフェレンスでもなければ、ロシア史研究所で外国人が報告を行なうことは珍しい。その数少ない機会のうちの 하나가、99年12月7日にもたれた、ジェフリー・ホスキング（ロンドン大学）の報告会であった。題目は「バトロネージとロシア国家」。ロシア史を通観するとの話であったので、中世史から現代史まで、様々なセクションのスタッフが会場に顔を見せていた。ホスキングは別の用件でモスクワに来ていたようだが、「研究所の古い友人」が是非やらせてくれと言うのでこの機会を設けたというのが、サハロフ所長の説明である。しかし、蓋を開けてみると、これは大変に下らない報告であった。専制や共産党独裁という概念ではなく、バトロン・クライアント関係という概念を用いたほうが、ロシア国家の歴史を考えるうえで有効であろうというのだが、ここにもバトロン・クライアント関係があります、あそこにもありますと、ただ言っているだけなのであった。

報告中から会場の人々は、おしゃべりなど始めてかなりざわついていた。さらに、質問の時間になってブルダコーフが、「それであなたの言うバトロン・クライアント関係は、封建関係とどう違うわけ」と問うと、くすくすという笑いが聞えた。ホスキングは一瞬つまって「...もちろん、違いはありますよ...それは...道徳的責任感」。ブルダコーフは失笑をもって応えた。会が終わってから、ソコロフに感想を問われたので「凡庸でした」と答えると、彼も顔を崩しながら「同意する」とのことであった。

私のこと

しかし、私はホスキングのことを笑ってすましているわけにはいかない。私自身、ロシアの研究者とやりあうには自分の力がまだまだ足りないことを、痛感しないわけにはいかないからだ。昨99年の秋、私は内戦期ポリシェヴィキ政権下での官僚主義の問題をめぐって、ルーズリーフ7枚分のレポートをつくり、ブルダコフとソコロフに見てもらった。レポートの前半では、18年秋の官僚主義批判キャンペーンを通じて、ポリシェヴィキが自分たちの価値観を再確認したことを記し、後半では共産党モスクワ市委員会とモスクワ・ソヴィエトの軋轢などを事例にして、「官僚主義」の具体的な発現について考察した。対立する諸機構の関係を規定することは容易でも、いたるところに散らばっているコムニスト同士の関係を規定することは遥かに困難であったというのが、暫定的な結論であった。

ブルダコフはこのメモを高く買ってくれた。ソコロフの方は、レポートを出してしばらくしてから、来週これについて議論しようと言ってくれた。それで私は一週間後の10月12日、ソコロフのセクションの人々にどういう点を強調して話せばよいか、どういう速さで話せばロシア語がきちんと伝わるか、どういう質問が出されるか等々といったことを気にしながら、それ相応の身づくろいをして、研究所に向かった。ソコロフの部屋には、いつも皆でお茶を飲んでいるだけのときとは違う、よりびりっとした空気があった。私はせまい部屋の後ろに座り、自分のメモに目を通していた。誰かが「報告者がまだいない」と言うので、私は「ここです」と言おうとした。とそのとき、皆が私とまったく違う方を見て、「来た来た」と言う。髭を生やして髪をきちんとなでつけた小柄な紳士が、背広を着て入ってきた。ソコロフが彼のことを紹介する。「××共和国の今世紀の社会的・経済的發展について…氏が博士論文の報告を行なう」。氏は原稿を取り出し、ゆっくりと話し始めた。やっと私は、自分が何か勘違いしていたことに気づいた。

およそ一時間後、報告と質疑応答が終わった。皆、お互いの間での、またほっとした顔の報告者との雑談に入った。私は出しっぱなしのメモを前に、ほうっとしていた。そこにソコロフがさっとやって来て、「ヨシロー、悪いけどわしゃ君が何を言いたいのかさっぱり分からなかった。問題が拡散していて議論に方向性がない。ここにコメントを書いといた」と告げた。差し出された紙片には、「テーゼを今後どう発展させるのか？」等々と記されていた。ソコロフはついで、タチアナ・スミルノヴァもレポートを読んだから、感想を君に言うだろうと続けた。タチアナは「材料はいい。でも評価がない。たとえばあなたは『官僚主義』の語は中央集権化を支持する側とその反対派との両方が使っていたと書いている。たしかにどちらの側の議論にも一理ある。ではあなたはそれをどう評価するのか」と言う。「でも僕は、この語が恣意的に使われていたことが言えればここでは十分だった」「それだけではなく、個々の現場の史料を調べて、各派の議論がどこまで現状に対応していたか、また各派の主張がどういうあらたな状況を現場で生み出したかを調べれば、ずっと面白くなる。そういう史料はアルヒーフにあるはずよ」。

私は、ソコロフのコメントにも頷けるし、ましてタチアナの言っていることはもっともだと思った。自分のレポートが貧弱なものに見えてきて、重い気分で家に帰った。研究活動ということでは、これがモスクワで一番落ち込んだときである。くらくらとした気分はしばらく続いた。膨大な史料の山に、どこまで降りていけばよいか。あくまで

史料にのみ依拠しながら、何をどのように語ればよいのか。この恐ろしく基本的な問題は、それ以来ずっと私の頭を離れないし、今後も離れることはないであろう。ロシア史研究所での私の生活はまだしばらく続くが、ブルダコーフとソコロフのところの人々と、早く正面から組み合えるようになりたい、彼も彼で仕事をしていると言われるようになりたい、それが私の現在の、正直な願いである。